

テーマ

ITが拓く健康・スポーツを
テーマにした地域振興

杉山 おはようございます。今日は久しぶりに沖縄に太陽が戻ってまいりました。本当は、その太陽と海を十分堪能いただくほうがよろしいような日でございますが、このイベントの最後のセッションとしまして、ITと健康・スポーツ、そして地域という、ひょっとすると今、日本が抱えている、あるいは地域が抱えている、一番大きな問題について議論していきたいと思います。

さて、私はインフォメーションテクノロジーという言葉が耳に入ってきたときには、ギョッとさせられて立ちすくんだような思い出を持っています。それがITという言葉になって、それだけの変化で何とはなしに身近なものになり、そして、ネット社会というような言葉になって、更に自分たちの生活を、そうしたITが取り巻く環境を実感して、その言葉が身近に感じられるようになった気がいたします。

その一方でスポーツを考えると、これも今、日本のスポーツは様々な課題を抱えています。更に、多くの人々の健康、そして自分たちが生活する地域社会、これらはすべて、今日的なテーマとして、私どもが考え、その課題解決を見つけて次代に繋げていかねばならないことだと思います。今日はそんなテーマを中心に、話を進めていきたいと思っています。

それでは、最初にこのディスカッションの基調スピーチといたしまして、渡邊さんに地域のスポーツ振興にとってITに何が期待できるのか、また「ネット社会におけるスポーツ」とは、一体何であるのかというところをお話いただき、パネルディスカッションを展開していきたいと思います。

渡邊 経済産業省の渡邊でございます。

最初に、なぜ地域においてスポーツの振興が大事なのかということをお話したいと思います。

今、日本が抱えている最大の問題は、高齢化です。高齢者の医療費をどのようにして減らすかということを考えなくてははいけません。ちょっと縁起の悪い話ですが、亡くなる直前までずっと元気でいて、最後はコロッと死ぬということを

「ピンコロ」と言います。ピンピンと元気で生きて、最後にはコロッと逝くという意味ですが、なるべく人間の人生をピンコロにしたいと思います。

高齢者になっても、ずっと元気でい続けるためには、友達付き合いを多くするということだと思います。仲間をたくさんつくるとのことです。友達がたくさんいると、ぼけません(笑)。ですから皆さんの中でも、「どうも自分は友達が少ないな」と思った人は、今のうちに性格を改めて、友達を増やす努力をしてほしいと思います(笑)。

では、高齢者になっても友達付き合いをするためには、どうしたらいいかということですが、

よく、大きな病院で、朝の待合室でお年寄りが集まって議論をしているわけですが、友達をつくるのもっと発展的な形で考えると、友達づくりというのは、やはり仕事の友達とか、趣味の友達とか、そのようなことだと思います。その中で、年をとっても仕事をするというのは、結構大変だということになると、やはりスポーツとか趣味というのが非常に重要になってくるのではないかと思います。僕も早く仕事を辞めて、60歳くらいになったら、何かちょっとスポーツでもして楽しみたいと思うわけですが、本当は、今、楽しまないといけないのです。60歳になってから楽しもうと思っても、もうヨボヨボになって全然スポーツどころではないということになってしまうので、本当はもう早く仕事を辞めて……(笑)。もちろん冗談ですけども、60歳くらいになってスポーツをやろうと思っても、なかなか楽しめるスポーツがないのです。例えば、自分は、マラソンが趣味、ゴルフが趣味と言っても、まず、仲間が探せないのです。野球をやろうと思っても、その審判がいまません。これが問題なのです。

実は3年くらい前に、私どもはいろいろな調査研究をやりました。やはり地域にスポーツを広めようとしても、仲間がいなかったり、対戦相手がいなかったり、そもそもチームが作れなかったりします。最近では、地方の中学校に行くと、バレーボール部ができないのです。6人とか9人のメンバーが集まらないということで、バレーボール

部ができないので困っているという例もあります。仲間がいない、対戦相手がいない、審判がいないという、この三つを何とかクリアしなければいけないのです。最後は、大会や会場の問題です。これがありません。これらが揃っても、用具がない、そのようなことがあるのです。

このような問題を解決するために、IT技術というのが役に立つのではないかと思うのです。我々が本当に自分の将来のことを考えたときに、年をとってどのように楽しい人生を過ごすかと思ったときに、スポーツをしながら健康でということを考えて、それで仲間をどのようにして探すかということになります。

一つ例をお話ししますと、市民マラソンというのがあります。東京では青梅マラソンとか、荒川マラソンとかいろいろありますけれども、マラソンというものは大会によって全然レベルが違う。3時間ぐらいで打ち切られてしまうものもあれば、5時間ぐらいまだ道を開けておいてもらえるものもあります。1万人参加するものもあれば、300人参加するものもあります。自分のレベルに合ったものを自分の仲間と一緒に参加するというのが、非常に大事だと思っています。そのような意味で、指導者、コーチ、審判のデータベースをつくって進めていくというのが、非常に大事だと思います。

今の高齢化社会を考えると、地域でスポーツを流行らせていくということが大事であり、そのためには、ITを使ってみんなで仲間を増やしていくことが大事だと思います。

杉山 ありがとうございます。お話を聞いていて、ようやく日本人も、人生の楽しみ方というようなことに気付き始めたようですね。私もIT社会というのはそれほど窮屈なものではないということが分りました。では、今の渡邊さんのお話を縦軸にして、このディスカッションをさらに広げていきたいと思えます。

それでは話が少々スポーツ的になるかもしれませんが。あるいは専門的になるかもしれませんが。すでにスポーツの現場、日本のトップレベルの中で、ITあるいはシステムといったような、情報技術

が、すでに多彩な展開を示しているというレポートを、宝田さんをお願いします。

宝田 今日は、朝早く起きて海岸を、50分間ぐらいウォーキングとジョギングをしました。目の前には、素晴らしい海があり、風が吹き、潮の匂いを肌で感じ、五感をゆさぶらされる思いがしました。ただ、この素晴らしい環境も、パソコンを使えば疑似体験することができます。端末を使えば、自分の行きたいところに行けます。そこで素晴らしい映像を見ることができます。音も聞くことができます。更に最近では、膨大な情報量を短時間に運べ、動画も見られます。

今までタコ糸で情報を流していたところに、大きなパイプラインに情報を流せるようになってきたことが、情報の流通量と速さを飛躍的にしました。パソコンと、テレビと決定的に違うところは、パソコンにはハードディスクという記憶装置があり、その記憶装置と、大きな作業机があります。それがメモリーと呼ばれるもので、あたかも大きな図書館のようなものです。そこにある蔵書の数がハードディスクに相当します。そして、本を持ってきて机の上に並べる、その机の大きさがメモリーということになります。

では、その図書館をどのようにして使うのか、これが、ただの図書館と違うのは、そこに情報の相互交換があるのです。自分が調べたいものを、検索のキーワードに入れて調べ、それを取り出してきてくれる。またそこで尋ねることもできる画期的な技術です。

今日はそのようなものをどう有効利用していくかという具体例をご紹介させていただきます。まず対象者を中高齢者に限ってお話をします。

今、東京都内や都市圏では、スポーツセンターブームです。銭湯代わりにスポーツセンターのサウナに行っている中高齢者の方も多く飛躍的に伸びています。駅前であり立地条件もよく、便利がいいし、銭湯へ行くより安いことで利用者が増えている。では、これを地方で考えてみると、そんなに頻繁にスポーツクラブに行ける立地条件のところは少ない。それは交通の問題もあり、ビジネ

スの問題もあるのかもしれませんが。いずれにしても、頻繁に、行くことはできない。

それはさておき、人間は加齢に伴って運動機能の筋の機能をはじめ、すべての運動能力が、ほぼ20歳をピークにして1%ずつ減少していきます。例えば20歳から30代を100とすると、60歳になれば筋力が30~40%落ちる。この落ち方は筋部によって差がありますが、一番低下率が高いのは、大腿四頭筋という太腿の前の筋肉です。この、筋の機能が低下すると、生活に支障を来します。中高齢者の方々に自立した生活を送っていただくためには、このような筋の機能の低下に歯止めをかけないといけない。そんな中でスポーツクラブに通わないで、自宅で何かできないか、あるいは過疎地域でも新しい情報をもとに、より効果的な筋機能の低下を防ぐことができないか。そのようにITが寄与できる可能性があるのではと考えています。

例えば自分がスポーツクラブに行く理由として、適切な運動のアドバイスをしてもらえとか、コミュニケーションができます。また、簡単な体力測定をスポーツクラブでやってほしいという希望が、利用者の声から上がっています。

これらのことは、ITを使って疑似体験することが十分にできます。例えば自分の運動動作が正しいのか確かめたいときは、デジカメを使って動画のモードに合わせて、それを取り込み圧縮して添付ファイルで送ると、それをサーバーを持っていて専門知識のある人が「これは問題である」と判断したり、サジェスチョンしたりすることは十分に可能です。これは膨大なデータ量が短時間に送信できる光ファイバーによって可能になってきました。

いまスポーツクラブでは、中高齢者の方が一番体力測定を実施されます。そのデータを基にデータを標準化し偏差値を出して、自分は何歳のレベルであるとか、体力年齢を知りたい人に、そこへ行かなくても教えてあげられることができる。

例えば、下半身の筋力を測定するには、スクワットを何回すればいいとか、「ゆっくりと10回できたら何歳である」とか、そんなデータベースを

持っていれば、自分のその数値を自分の端末のパソコンから入力して、データベースに送ります。その絶対値を基にデータの標準化の作業を行い、偏差値が60なのか、50なのかの評価ができます。これは別に現場に行かなくてもできる。その評価を基に、処方箋を書いていきます。それでトレーニング・プログラムを提供していきます。

例えば下半身の力が年齢に比べて劣っていれば、それを改善する有効なトレーニング・プログラムの提供は十分に可能です。特に沖縄のように離島が多いところでは威力を発揮すると考えています。

例えば万歩計を付け体重・歩幅・歩数を入れて、パソコンの端末を叩いてデータベースにアクセスすれば、消費カロリーが出ます。これで、自分は1日に基礎代謝——いわゆる、生きていだけで必要な熱量と運動を合わせて「1日これだけ食べてもいいよ。これ以上食べたら中性脂肪過多になりますよ」という話は、十分可能です。運動をこれぐらいしましたということが定量化できれば、ご飯を何膳食べれば何キロカロリーとか、入力するだけで自動的に出てきます。これはフリーソフトで入手が可能です。これで、日々の健康管理にも十分使うことができます。

五感の話に戻りますが、ITを使うのは人間です。いくらいいものがあったとしても、それをコントロールするのは人間であることを忘れてはいけないと思います。

それでは、お手元に配りました資料をご覧ください。私の出身は早稲田大学で、ずっとラグビーをやってきました。そこで、少しでも母校のラグビー部に恩返しをしたいとこの資料にある企てをしています。これは部員が100~120人というトレーニング実施者に対して、できるだけ少ないトレーニング管理者で、しっかりとトレーニングを管理していこうというのが、当初の目的でした。部員が120人もいると、トレーニング実施者10人に対してトレーニング指導者1人というのが上限です。そうすると10~12名の人を雇わなければならない。それで、いかに的確に日々のトレーニングを管理して、トレーニング効果を出していくかということで、このシステムを考えました。

ご覧のようにトレーニングルームの中には、一般のスポーツ施設などにあるトレーニングマシンという機器があります。これは筋力を改善するための運動機器です。これはどこにでもあるものですが、この動作をトレーニング機器でどれぐらいの速度で何回やったのかということが、自動的に読み込まれていきます。この速度というファクターは重要で、同じ重量をより速く動かすほうが、いっぱい筋繊維を使います。ゆっくり動かすことも大事ですが、時には速く動かすことも大事です。指導者がそのトレーニングを見なくても、実際にその場にいらなくても、このトレーニング実施者がどのようにトレーニングをしたかというデータで大体分かってくる。これは、学生にとっては気が抜けない、恐ろしい機械ですが、そのような管理をするのです。

このメリットは、トレーニングの実施内容を、サーバーひとつで一元管理できるということです。これは人的な面で削減が達成されます。ここで一元管理をしてトレーニングを1か月、2か月続けていきます。そんな中で、最初より2か月目のほうが筋力が増えた、増えなかった、あるいは軽くなってきたからもう少しトレーニングの強度を重くしようとかコントロールできるのです。

これはトレーニングする側にとっても、いい意味で常に見られている、ちゃんと指導してもらっているという疑似体験ができるのです。

次に資料の2番目にあるように、その体力年齢を測るにはデータベースが必要になってくる。これはデータベースがないと、いくら自分が「これぐらいできるから」と言っても、ほかの人との相対評価ができない。相対評価ができないと、自分がどこにいるか分からない、これはトレーニングする側の動機付けにも関係してくるのです。

例えば、60歳の方が40代の筋力がある、あるいは40歳代の方が60代の方の筋力レベルしかないとする、なにかしら感情的になります。あまりにも低い値が出ると「がんばろう」とか、がんばった結果、実年齢は60歳なのだが、40代に評価されたとか、モチベーションを積極的に高めてくれる効果もあります。

今、私は早稲田大学以外に、日本ラグビー協会のユース、21歳以下の体力強化のすべてを任されていますが、長い日本ラグビーの歴史においても、そのようなデータベースがない。データベースがないと、今その選手がどのようなレベルなのか、昔と比べてどうだったのかと比較検討する手立がありません。このデータベースをきっちり作っておけば、インターネットは相互の情報交換が可能ですから、非常に重要なことになってくる。一方通行ではないから、データベースを相互に作っていくことができる。いま、そんなことを現場で具体的に進めています。

IT技術はすばらしいけれども、人が使うのですから相互でコミュニケーションをしないと、そこにはデータは溜まっていきません。その意味で、相互の情報交換が必要になってくると言っているのです。このような中高齢者と大学のスポーツ現場におけるITを利用した事例の取り組みをご紹介します。

杉山 宝田さんがご紹介された事例のなかで、一番印象的だったのは、部員、学生の方がちゃんと指導してもらっているという意識が出てくるというお話でした。そして、宝田さんが最後に付け加えられた、長い歴史を持つ日本のラグビー、あるいは早稲田のラグビーでも、前のデータが一つも残ってない、比較検討するものがないという事実です。きっと宝田さんの現役時代はともかくとして、前にはきちんとした指導がなかったのかも知れませんね。いや、きちんとした指導はあったのでしょうか、それは「根性」、「精神」、「伝統」とか、目に見えないものがスポーツのバックボーンになっていて、データの的にスポーツをするという細かい話はなかったのではないかと思います。

このようなネット社会の中で一番特徴的だと思うのは、スポーツがトップのレベルでは情報が交流し合うということです。これまで一部のエキスパート、オーソリティ、あるいはプロフェッショナルというような方たちだけが持っていた情報を、一般の人たちと交流できるというのは、非常に大きいことだと思います。

そして、それを活用し、理解し、消化していくことが、これからのITと人間の暮らしていく中の大きなことだと思います。すでにそれが早稲田大学という伝統的なスポーツのチームの中でも、活かされ始めたということなのですね。

宝田さんにもう一つお聞きしますが、資料に早稲田大学ラグビー部上井草トレーニングルームというものがありますが、現役のころは、このような施設はあったのですか。

宝田 いや、こういったものはなかったですね。

杉山 ただ盛んに走ったり、うさぎ跳びをしたりしていたわけですね。

宝田 そうです。

杉山 ゼッターランドさんは、アメリカでトップスポーツのキャリアをたくさんお持ちです。そこでオリンピックにも出場されて、数々の栄光をお持ちですが、アメリカのトレーニングの象徴といえば、コロラドスプリングスのトレーニングセンターでしょうか。あのようなトレーニング施設があって、スポーツを科学的に教えるとか、科学的にスポーツに親しんでいくという土壌あるいは風土が生まれたと感じられたことはありますか。

ゼッターランド 私自身も、スポーツの原点はコロラドスプリングスにあると言えます。オリンピック・トレーニング・センター（以下、トレセン）で、数か月、あるいは定期的に合宿、試合を組んだことがありました。そこに行って強く感じたことは、トレセンのITの凄さです。そのハイテクに「ああ、こういうのがあるというのはすごくないな」と思いました。IT関連で言えば、これまでのオリンピックに関する記録です。映像であったり、データであったり、それらを一般の方も簡単に検索できる。それは今のインターネットと変わらないものだと思いますが、10年、15年以上前から、そんなシステムが一般の方にもすでに公開されていました。

トレセンの役割は、選手がトレーニングをする場所だけではなくて、一般の方が見学に来られたときに、4年に1度しかやらないオリンピックのイベントが、毎日のイベントとして体験できる場所でもあるのです。

トレセンがそのような所であったということが、私にとって「ああ、これこそ一般の人にとってトップアスリートが日々やっているトレーニングが、より身近に感じられ、そしてもっと応援してもらえる、応援しやすいような環境づくりが整っている」と思ったのです。

一般の方には、そんなハイテクなところでも、いろいろとスポーツが普及していくことが感じられました。今、宝田先生が「技術も人ありき」ということをお話しされましたが、われわれもトップ選手として、相手チームの情報をどのように分析するかなど、いろいろなデータベースを基に解析してきましたが、どのデータを駆使するにしても、人の技術がなければ使えないし、そこにわれわれの気持ちが入らないとだめですね。

例えば、最後の勝負がかかったときに「ここで勝ちたい」というのは、勝ちたい気持ちが大いけいけい、勝利を得るという機会が本当に多いのです。トレセンに来ると、歴史とかそれらの情報は、ITによって得ることができます。また、スポーツの世界の人間臭さ——人間本来の闘争本能とか、その奥に眠っている感覚を呼び起こさせられるというのもの、選手の練習や試合を観ることによって体験できます。これが1ヶ所に同在しているトレセンに行けば、両方が体験できるのです。これはやはりいいシステムだと思いました。

日本の中で、選手としていろいろな体育館に行って試合をしたのですが、本当に施設はすごい。トレーニング機器は新しく揃っているし、空調は整って非常に素晴らしいものです。でも、まだ何かちょっと足りない部分があると感じます。それは、これから造られる新しいスポーツ施設や既存の施設に、今ご紹介したアメリカのトレセンようなソフトやシステムが備わっていくことが必要ではないかということです。

今年のアテネオリンピックの年です。私自身、

オリンピックは2回出場していますが、今回は、選手としてではなくてもアテネに行きたいという気持ちが非常に強く、行く決心をしています。これだけ長い歴史の中で、スポーツがどんどん発達してきて、スポーツもここまで来たか、ITを駆使するところまで来たかと、大変に驚くところがあるのですが、そうやってきたところで、また原点のオリンピック発祥の地に還るわけです。これが、私にとって重要なことなのです。テクノロジーとか、IT化が進んでいけばいくほど、人間の原点にまた還らなくてはいけないのでは、還るということを考えなくてはいけないのではないかと、強く実感しています。

杉山 そのITが発達してくる、ITに囲まれた社会そのものが、人間というものを改めて見直すことになるというのは素晴らしいお話だと思います。それと、宝田さんのお話の「五感」という部分です。五感、人間臭さ、最終的には人なのだというのも、どのような時代、どのような社会になっても忘れてはいけないことだと思います。

杉山 渡邊さん、宝田さんのお話にも、中高年の体力というお話がありましたが、今、問題になっているのは、実は子どもの体力ということです。子どもに体力がなくなつてと言われています。体力テストがあると、今の子どもたちが自分の親の代よりもそれが下回っていると、よくデータ的に紹介されます。子どもの体力をどうするかというのは、これから大きな問題だろうと思います。

体力をつけるというのは、将来大きくなって健康な身体を備えていくと、自分の防衛体的なものになるのですが、今それが不安になっています。つまり文明が進んでいくと、その時代の子どもたちが歩かないですむ社会環境といった状況を考えなくてはいけない時にきていますね。

私は先週まで、雪国地帯にいたのですが、そこに来る若いスキーを楽しむ人たちは、今はもう全員手ぶらでやってきます。スキーは宅急便でスキー場へ送ってしまう。電車は混まなくてすむけれども、人間が自分の荷物を手に持って運ばない、

そんな時代ですね。

その問題で、宝田さん、今早稲田のラグビー部などに入ってくる若者たち、あるいは日本ラグビー協会U-21の指導をしておられて、子どもの体力、若者の体力の低下を、感じられることはありますか。

宝田 たぶん2極化していると思います。ラグビーのU-19や21歳以下の限られた子ども(学生・生徒)は体格も大きいですし、もちろん体力もあります。私などの立場では低下している体力レベルというのを体感することができませんね。想像ですが、パソコンをしたり、全然スポーツをやらない若者、子どもたちが増えて、その部分で体力の低下を引き起こしている層が多いのではないかと考えています。

杉山 パソコンにしても、ゲームソフトにしても、全部大人が考え出して子どもの体力を奪っているということは、考えなければいけないことだと思います。また、冒頭で渡邊さんがおっしゃいました、友達をつくる、仲間をつくるということは、これからどんどん必要になってくるということにも結び付くと思います。

ここからはITと離れて、今なぜ地域の中でスポーツというものが叫ばれ、求められ、そしてそれが実践されていこうとしているのか、具体的なテーマとして話し合っていきたいと思います。

これまで、聞き役だった成田さんに、ここは口火を切っていただきます。改めて今なぜ「地域とスポーツ」なのか、あるいは今の地域におけるスポーツというのはどのような状況にあるのかお話しください。

成田 私は10年ぐらい前から「田舎おこし」を仕事にしています。日本の北から南まで、沖縄は宮古島まで、10年で20個所の田舎を開発してきました。私のスタンスは過疎・高齢・交通不便、この三つが好きで、好んでやっています。当地の名護は私の主旨にピッタリです。5年前には名桜大学のテーマでちょっと関わったことがあります。

日本の田舎は自然の資源が豊富で、7割ぐらいが使われていません。将来の日本を考えるとこの7割を生かしていくことが必須条件ではないかと思っています。

この10年間、地域に、幾つかの時代の変化がありました。10年前に着手したときは、どの田舎も整地をして工場を誘致し発展しようという動きがありました。工場を誘致すると企業の雇用が生まれ、または税金が入るわけです。次に少し余裕が出てきて公共施設をつくる時代がきます。どの村どの町も立派な公民館、あるいは美術館、音楽堂もできて、イベントが華やかだった時代がありました。

しかし、バブルがはじけてここ5年ぐらい、どの村・町でもテーマは健康とスポーツになっています。なぜこの健康・スポーツがキーワードかといいますと、先ほど基調スピーチでお話いただいた渡邊さんの主張された、高齢者の問題が課題なのです。ご存知でしょうか、いま日本の高齢者医療費というのは30兆円です。30兆円という数字はなかなか想像できませんので、もうちょっとサイズを小さくしてみます。例えば2万人の町、大体それぐらいのサイズの町だと、年間の行政予算は歳入・歳出、大体80億円ぐらいです。2万人で80億円です。80億円でその村・町の高齢者の医療費は幾らだと思いますか。なんと20~30億円にもなるのです。80億円という分母、全体の中の20~30億円が高齢者医療費なのです。これは今使っている人ですから、これから団塊の世代の人が65歳以上になった時さらに増えていくわけです。そうすると、ますますこの医療費は、市、町、村の財政を圧迫していきます。

自立化しなさいという国の政策ですから、これから特に地方財政は交付金が少なくなっていく、収入が減る中で支出が伸びる、これはどの村・町もピンチといいますか、破産状態になります。これに気付かない首長さんとか地方自治体の方は、経営者失格ではないかと思うのです。自分のところの歳入をどのようにしてがんばっていくかということよりも、歳出を減らしていく、今ちょうど日本は、バブルがはじけた江戸中期の時代だと言

われます。知足、足るを知るという時代で、支出を減らしていく、これにまず着目しないといけないと思います。

先程の渡邊さんのお話と私は全く同じことを地域で言っているのですが、今まで地域、地方へ行くと「わが町は病院があります、素晴らしいでしょう。福祉施設もこんなに立派ですよ」とPRしますが、私はそれは違うのではないかと思います。当然ながら病院は必要、福祉施設も必要なのです。しかし、病院というのは病気になった人が行く、福祉というのは寝たきりになって介護要の人が行く、それ以前の人を、どうやって病院に行かせない、介護施設に行かせないかという策を考えなくてはいけないのです。それには、極端ですけれども、「わが町は病院がないのですよ。わが町には福祉施設は一軒もございません」と言えるような元気な人たちが住める、そのような町づくりをしましょうと言ってきました。私は、元気な人がいるからこそ、産業とか企業とか、住んでいる人たちが生き生きとする、その結果歳出は減り、逆に歳入は増えるかもしれません。このようなところに視点を置くというのが、今最も重要ではないかと、私は思います。

杉山さんの「今、なぜ地域か」は地域の自立を促し財政ピンチを救う策として、健康・スポーツという観点で、まずスタートではないかと思いません。直近で手がけた地域ですが、ノーベル賞をもらった小柴さんのニュートリノ、これは神岡町にある鉱山の跡が現場です。岐阜県と富山県との県境に神岡町はあります。ここの流葉というスキー場が名前は有名なのですが、スキーは人口の減少で困っていて、何とかそこを「春夏秋冬、人が入ってくれるようにしてほしい」ということなので、健康・スポーツをテーマに復活を考えました。その結果健康ウォークの村にしました。健康、歩く、ウォーキングなのです。ダイエット・ビューティフル・ビレッジという、要するに「太っている人、来てください」と、それで2日、3日ここで温泉に入って、いろいろなコースを歩いてもらいます。来た日に計量して、帰る日に計量して、1キロ減っていたらポイント何点とい

て、ポイントに応じてその地場のお土産がもらえるというシステムを構想しました。

早稲田大学の運動生理学の先生方にも支援していただき、このウォーキングはただ歩くだけではなく、どのぐらいの勾配を歩くと心拍にどのぐらい影響するかとか、なだらかな距離をどのぐらい歩くとどのぐらい身体に影響があるか、抵抗力が付くかということのを計算してもらいまして、今素晴らしいデータになっています。そのデータに基づいて来た人と話しをして、そのご夫婦ならご夫婦の今日一日の歩く散歩コース、あるいはトレッキングコース、そのようなプログラムを設定します。プログラムが終われば帰って来て温泉でいやして、そして食事も糖尿の方はこのようなことだということでセットします。しかもそれは病院らしくない、面白い、楽しいというベースにしながら、それをセットしていきます。このようになってくると、元々のベースは遊びなのですけども、それが自分自身の生活習慣のきっかけ、見直しと同時に、後ろ側には科学がきちっと備わっているという、このようなコースを構想しました。地域にとっては、土曜日・日曜日に多くの人が入るというよりも、平日にいろいろな方が歩きに来てくれるという状態のほうがよくて、現状はそのような状態になっております。地域の資源を使って健康・スポーツというものが効を奏しています。

地域に何かのスポーツをと、いきなり外から何かを持って来るということは、すぐ人気とかブームとか、相手の事情で変わってしまいます。まず地元・地域の人を健康、元気にするということのをベースに努力すると、それがやがて交流産業を促し、外との連携というののできてくるのではないかと思います。そのようなステップがすごく大事かと思えます。

杉山 日本ではたくさんスポーツ都市宣言、健康都市宣言をした市や町があります。そのスポーツ都市宣言や健康都市宣言の中味のコアになっているのは、「スポーツ施設が充実しています」、「素晴らしい野球場があります」、「テニスコートがあります」、「芝生のサッカー場がこんなにあります」

というのがうたい文句で、それらハードが充実しているからスポーツ都市である、ということなのですね。

渡邊さん、成田さんのお話を伺っていると、「病院のいない町」というのが健康都市宣言の一番大きなことかもしれませんね。病院のいない町というのが健康都市宣言、スポーツ都市宣言の表に出てこなくても一つのキャッチフレーズ、スローガンになるような気がいたします。今、成田さんが過疎・高齢・不便とおっしゃいました。過疎・高齢・不便というと大変なマイナス的な要素のように伺えますが、これまでの皆さんのお話で渡邊さんは何かご意見やご感想はございますか。

渡邊 非常に面白いお話をいただいてありがとうございます。今、医療制度のお話が出てきたので、ちょっと補足的にご説明します。この医療制度の話とスポーツの話は、決して切り離せない問題なのです。今の医療は、病気になってから病院へ行くのです。どこか悪いところが見つかったから行くのです。そうすると、薬をもらったり、検査をしたりして治すのですが、病気になって病院へ行くこと自体が、そもそも手遅れなのです。

本当にやらなければならない医療というのは、病気にならないようにすることだと思うのです。今の医療制度は、病気になってから病院に行って検査を受けると、保険を使って安く診療を受けられるのです。でも本当は、ちょっとおかしいのではないかと思うのです。

例えば、日本人の4分の1ぐらいが抱えていると言われている肥満について、ちょっと極端な話をしてみますが、肥満でコレステロールが高いとか高血圧になると、これは本人の努力不足によるという面があります。そうしますと、そのような人たちが安く保険を使って診療を受けるというのは、実はおかしいのではないかと思うのです。本当は、そのような人たちからはペナルティ的にお金を高く取って、逆に、健康なときに健康診断を受けるときに保険を使って安く健康診断を受けられるようにしなければいけないのかもしれませんが。もちろん、医療というのはそんな単純な

ものではありませんが、今の医療は、病気になってからの予後医療という形が中心で、病気が見つかったから治療するのでお金がかかる場合があるのです。これからは予防医療に転換し、健康なときにこそ病院に行かなくてはいけないのです。

私は3か月に1回、健康なときに病院に行っています。健康なときの血液を採って、いかに健康状態を保つようにするかという方法をとっています。したがって、与えられる薬品はビタミンCとかビタミンEなどのサプリメントだけなのです。ビタミンCとかビタミンEをとって、免疫抵抗力を高めていくのです。予後医療から予防医療に移行するときが一番ポイントになるのは、サプリメントと運動なのです。運動をすることが大事です。

ところが、問題はここからなのです。例えば、学校や会社では健康診断をやっています。多くの人は健康なときのデータを、1年間に1回ずつ取っているわけです。1年間に1回、健康データを健康診断で取っているのですが、それは、ほとんど活用されていないのです。病気になって病院に行ったときに初めてカルテを作ります。お医者さんはそのカルテの分析をします。本当は、今は全然使っていない健康データを分析して、どうすれば病院に行かないで済むか、どのような病気になりそうかということを考えるべきです。例えば、体重が増えて血圧が上がってきたから、「あと5年ぐらいしたら病気になるよ」というような予測もできるかもしれないということで、その健康診断ときのデータをいかに分析するかというのがポイントなのです。それを使っていかにスポーツをやらせるか、あるいはサプリメントを処方するかというのが重要だということで、そのように制度自体を変えていかないといけないのですが、そこには壁があります。

壁というのは、今申し上げたように健康診断の情報と、それから病気になってからの医療の情報というのは、結び付いていないのです。本当は一緒に分析したいのですが、それはできないのです。様々な個人情報を名寄せすることに対する抵抗感や、それぞれのデータの管理者の違い（いわゆる縦割り）などが障壁になっています。健康診断の

情報は、学校の場合、文部科学省になるわけです。病気になってからのデータは厚生労働省になるわけです。

杉山 予防医療という点ではトレーニングも予防医療的なもので、常にベストな状況に置いて競技に送り出すことだと思います。思い出したジョークがありました。「病院の待合室」というジョークです、そこで中年の女性の方、高齢の女性の方たちが3人ぐらいお話をされていて、いつもは姿を見せるおばあさんが1人、今日はいないのです。そうすると、1人の方が「あの方、お体でも悪いのかしら」と、こう言ったというのです。これが病院の待合室だったというのがオチで、すごく受けました（笑）。

今度は宝田さんとゼッターランドさんにお話しをおうかがいします。地域とスポーツは今の健康面、あるいは福祉面といったこととは別に、スポーツ界的に今、地域が一つのスポーツの単位になろうとしています。例えば、ゼッターランドさんは企業のトップチームでバレーボールをされ、宝田さんは大学でスポーツをされてきましたが、日本のスポーツは企業と高校、あるいは教育現場でずっと支えられてきました。どうも高校、教育現場の方は子どもが少なくなったこともあって、学校スポーツの現場では「学校でそこまでのめり込んでやるものか」といったような議論もあって、だんだん、そのところが薄くなってきました。

企業のほうはご承知のようにこの不況のあおりを受けて、どんどんとスポーツ活動を縮小しています。そんなことを合わせて、改めて地域でスポーツをということが出てきたと思うのです。そのものの考え方、これまで見てこられた日本のスポーツ界を考えて、地域とスポーツについて、日頃考えておられることがありますか。

宝田 大きく分けて二つあります。一つは、ラグビーの競技者人口を、何らかの手立てで増やしていかないとはいけません。その観点からすると、まず地域に一流の選手を派遣して、その競技に関係する子どもたちや中高齢者の理解を得る努力とか、

子どもの育成に役立つ指導の支援をするということが一つです。二つ目は、財政やお金などの援助のような有形な効果、形のある効果とは全く逆に、形のない無形な効果についてです。これは具体的な事例をご紹介します。

2003年5月、早稲田大学は杉並区と協働事業の協定書を結びました。そこで何をするかといいますと、学生のインターンシップと子どもの体力づくりです。もう一つの柱は、中高齢者の健康教室です。その一つの健康教室を私が責任を持ってやらせていただいています。そこで、筋力を落とさないように教室を展開していくのですが、実は、地域とスポーツの無形な効果というのがあります。そこに専門の指導者を派遣するのですが、私のゼミ学生30人ぐらいが地元の中高齢者の運動指導の手伝いをするのです。小さいころだと町とか村で、子どもが中高齢の方から叱責されたり、注意されたり、あるいは逆にお年寄りを助けたりといった、コミュニケーションの場があったのですが、いま都市部では、そのような機会もなくなってきています。これを、地域とスポーツというキーワードから考えると、今の若い学生が中高齢者と接するチャンスがあって、そこで無形な、関連した、事柄に携われるということでしょうか。

杉山 早稲田大学の伝統的な体育会、スポーツ部が地域社会と結びついてスポーツ交流をしたり、指導をするというのは画期的な試みですね。これは大学のスポーツ施設も一部開放されているのですか。

宝田 杉並区の場合は、杉並区のスポーツセンターに行って授業をします。所沢では大学がキャンパスを開放して、中高齢者の方、市民の方に使っていただくということをやっています。

杉山 ゼッターランドさん、日本のスポーツと地域のスポーツ、これは新しい活動の芽だと思えます。これまでのご経験、アメリカでの一流選手たちの地域への溶け込み方、あるいは若者たちへの指導、そのようなキャンペーン的なことで、ア

メリカに限らずヨーロッパなどで、そのようなケースがありますか。日本のスポーツはスポーツという囲いの中から、なかなか飛び出さなかったような気がいたしますが、その点いかがでしょう。

ゼッターランド 私たちも国内の遠征等々があるときに、地元の皆さんに試合の応援に来ていただきます。それはバレーが好きだから観にきてくださることもあると思うのですが、観にきてくださる方にいい試合をして恩返しといたしますか、それを還元することも大事なのですが、実際にお客さんに来ていただくだけではなくて、われわれがその現場に足を運ぶことが大事だということです。

確かにツアー中ですが、積極的にその地域の方たち、本当にバレー好きのお年寄りから小学生まで、たくさんの人たちを招待して、技術指導をします。これは、子どもたちに対しては将来的にその競技スポーツの方向に向かっていってこれれば、いい、トップ選手と触れることによって「ああ、こういうふうになれるかもしれない」という、一つの希望を持って、子どもたちに接しています。

ただ、年齢を過ぎている方には触れ合いの場所ということで、われわれを通じて世界に輪が広がっていけば、それはいい効果をもたらすのではないかと思います。その二つの要素を含めて、競技スポーツとは逆に生涯スポーツ、楽しみとして、レクリエーション・スポーツとしてやっていただける、その二つの側面を大事にしていこうというところがあって、ツアーに出たときには積極的にバレー教室等々を設けていました。

ただ、それがナショナルチームとして、一つの自分たちの役割ということも考えての地域貢献ということです。実際に地域ということに密着して考えてみると、今からもう35年ぐらい前に、母がアメリカに移住した時のエピソードがいい事例かと思えますのでご紹介します。

当時はインターネットなどというのもまだ無い時代でした。コンピューターも一般家庭に普及していない時代ですが、根っからのスポーツ好きの母が、どこからその情報を得ていいかわからないというときに、地域のレクリエーション・センタ

一に行ったというのです。そこに行って皆とスポーツをしながら、たくさんの地域の情報を得ていく、そのおかげで異国の地に移り住んで子どもを産んで不安もある中で、スポーツという自分の一番得意なもの、好きなものを通じて仲間を得て、そこから情報を得ていくということで、生活の中でも、自分の気持ちの中でも随分安定することができたと、母が言っていたことを思い出しました。

そんな地域での指導、場所を設けるということ、指導者をいろいろな形で置いているということが、非常にいい形を成していたと思います。例えば、リタイアしたスポーツ選手が地域の指導者になっているとか、いろいろな形があると思います。例えば、高齢者の方のやりがいがいとかが、大事になってくると思うのです。指導、それも一つの活性化のチャンスとしてあるのではないかと思います。

いま私の母は千葉県の成田に住んでいますが、そこは新興住宅地ではあっても、意外とスポーツをする場所がない。子どもたちがスポーツをしたくても十分にスポーツ環境が整っていません。そんななかで、母は子どもたちを集めて、「じゃあ、ミニバレー教室をやろう」と、細々と活動をしています。

確かにスポーツの果たす役割というのは、ITの話と絡めると、大変に高度なものに考えられがちですが、本来スポーツのもたらす役割というのは、楽しみとか遊びという意味です。その楽しみの中には、教育というものも含まれるはずですが、実際に共働き家庭の場合は、子どもと接する時間が少ない、核家族化においてはお年寄りと触れる時間が少ない。しかし、地域には子どもたちにスポーツや遊びを教えたりするノウハウを持った、高齢者の方はかなりおられるはずなのに、実際にはなかなか表面に出てこない。こうした方々を活かすチャンスがない。それを考えると、その方々の力を活用できないことはたいへんに勿体ないことです。何とかとその力を活かす方法はないかと思えます。

今、子どもたちの体力の低下が言われていますが、実際に子どもたちは耳や目から得る情報が多くいろいろなことをよく知っているが、それをど

う処理していいか、その情報をどう取舍選択していいかというところまでには至っていないし、身体を使って遊ぶという機会が減っていると思います。この現状の中で、子どもたちを地域の中でスポーツや身体を使った遊びを教育、指導ができるのは、多くの経験を有した地域で十分に時間的余裕を持っておられるベテランの方々だと思うのです。確かにトップ選手が地域に行き貢献することも有効ですが、地域におられるそれらの方をもっと発掘して、そのような場を与え、設けることも大事ではないかと思えます。

杉山 宝田さん、ゼッターランドさん、日本はスポーツの基盤を拡大する、普及するといったときに、全てそれは競技者の卵を探すことを指すのですよ。愛好者を広げるというよりも競技者の卵を探して、トップレベルそのものの底辺にしてしまう。いま、ゼッターランドさんがお話された、スポーツをレクリエーションなものだと捉えることがなくて、すぐに競技に行き着いてしまう。

ゼッターランドさんにお母さんがアメリカでスポーツのインフォメーションをレクリエーション・センターで求められたと聞きましたが、こんな例は日本ではあまりないことですね。日本のレクリエーション・センターに行くと、ハイキングコースの案内や観光マップはもらえるけれどもスポーツという入口にはなっていないと思うのです。

どうでしょう、宝田さんやゼッターランドさん、いま地域のスポーツに手応えが少しずつ見えていますか。スポーツを楽しもうではないか、そこからスポーツにのめり込んでいく、熱中していく、才能のある子は別の道に行こうかということが、少しは日本も出てきていますか。

それとも相変わらず鍛錬のスポーツといいですか、鍛えるスポーツのままでしょうか。日本では「スポーツ」をうまく翻訳した言葉がなくて、スポーツはスポーツとして取り扱われてきています。それが悪いとは思いませんが、体育・運動・競技となると、どうも競技が一番好きなスポーツの訳となるようです。その辺りはどうですか。お二方はいつも若い方々と接しておられて、今の若者は

スポーツへの考え方が変わってきていますか。

宝田 これからだと思います。

ゼッターランド 答えとしては、まだまだこれからだと思いますが、例えば健康について考えると、数字として指標が出てきたときに、それが一つのバロメーターになって、その数字にがんじがらめになってしまったりする傾向があります。それを見て「うわっ、健康にならなきゃ」とか、かなり気合の方向に行ってしまうのではないかと心配します。ただ、健康になろうという気持や願望は大事なのですが、決して肩に力を入れてやって健康になれるものでもないし、それを楽しむということもなかなか難しいと思うのです。

スポーツの語源といえば「楽しみ」とか「遊び」だと言いましたが、よく「ヨーコさん、日本とアメリカのスポーツの違いって何ですか。アメリカって凄いコンピューターとかデータとかいろいろ、駆使してやっているのでしょうか」と聞かれます。確かにITの導入や科学的な分析などはやってはいますが、先ほども話したように、最後の最後、その勝負を決めるときに監督が言う言葉は「All your spirit」——すべてのあなたの精神・気持ち・魂とか、「All your love」——あなたのそのバレーボール、スポーツに対するすべてのその愛情をこの一瞬に注ぎ込んでやりなさいという原始的なスポーツの言葉が出てくるのです。

それがあから、エンジョイできると思うのです。そこのアナログとデジタルの世界のバランスを、どう上手くとっていくか、これもこれからの課題の一つなのではないかと思います。地域のスポーツがもっと身近になるためにも、そのバランスを上手くとることは大事なのではないでしょうか。

杉山 ゼッターランドさんが、どうしてもアテネオリンピック、近代スポーツの原点を訪れたいとおっしゃった気持ちがよく分かりました。

以前に別のところでゼッターランドさんと子どものお話をしたときに、日本は失敗をしたりミスを犯したりすると「もうちょっと練習

をしよう」と言うけれども、アメリカでは「ナイストライ」と言う、「よくやったじゃないか、やってみて、それに挑戦したのが良かったじゃないか」と子どもたちに教えると、ゼッターランドさんが話されたと記憶しております。日本はスポーツに対するハートの部分や教え方が随分遅れているというより小さな中に留まっているように感じます。

さて、地域とスポーツを考えると、地域がスポーツに絶好の場所、ロケーションを提供するという意味での地域とスポーツというかかわり方も多くなってきました。また、スポーツが何か県民趣味といえますか、地域社会と一緒にスポーツに熱中する、そしてそれがあつた種の共同社会意識のようなものを生み出し、バラバラな一つ一つからスポーツに集まろうという動きです。

皆様方をご存知かもしれませんが、Jリーグで幾つかのチームがそのような形を採っています。地域側がスポーツというものをいろいろな面で捉え始めたのも、この時代だろうと思います。

特に沖縄の場合、この時期には気候的、季節的、自然条件というメリットがあることで、多くのプロ野球チームやサッカーチームがキャンプを張り、その他のスポーツ関係者が訪れています。元々沖縄はボクシングやバスケットボールで、素晴らしい選手たちを輩出したスポーツが風土の中に染み込んだ土地ではありますが、また別の形で沖縄というのが脚光を浴びていると言われています。

杉山 沖縄と言えばプロ野球のキャンプ地を連想させるほど、スポーツの世界にとっては最高の立地条件が整っています。また、ここでキャンプを張ることがプロ野球にとって大きなパブリシティにもなるということになってきています。

さて、ゼッターランドさんは日本ハムのキャンプの取材に行かれたそうですね。新しく札幌にホームを移した日本ハムですが、キャンプをご覧になって今年のファイターズはどうでしたか。

ゼッターランド ヒルマン監督と実に3時間もお話をさせていただきました。ヒルマン監督によると、去年はすべてのメディアの取材が監督に来て

いたのが、今年は新庄選手の入団によって全部それが彼に行ってくれるから助かっている。監督に注目が集まることもいいが、選手を一番に取り上げてもらえることは、ベストだ、と、おっしゃっていました。

それはともかく、私はスポーツキャスターとはいえ専門はバレーボールですから、野球にしても他のスポーツにしても多少分かっていても、どこまで突っ込んで話しが聞けるかというのがいつもの課題です。だから、インタビューするときは、ちょっと緊張しました。それで、ヒルマン監督から「私と最初に話をすることが決まるときに緊張した？ ナーブスになった？」と聞かれて、正直に「はい」と答えてしまったのです。「その理由は？」と聞かれて、「同じスポーツとはいえ、自分の専門はバレーボールだから」と言ったら、「それで十分じゃない」と言われました。

ヒルマン監督はアメリカ人ですが、「じゃ、二人の共通項というのを挙げてみようか」という話になりました。「君はアメリカ人と日本人のハーフで、二つのカルチャーを知っている。また、二つの言語をしゃべることができる。そして2回オリンピックに行ったスポーツ選手であり、そしてコーチングもやっている。これで十分に共通の話のネタにならないかい？」と言われたところから、3時間の話がスタートしました。

何を言いたいかという、本当にスポーツをやっていてよかった、違う競技でも、スポーツをやっているだけで共通言語になりうるのだということを上記したかったのです。

杉山 得てして自分だけのスポーツに囲まれて過ぎてしまうし、そのスポーツを取り外すとほかのスポーツのことは何も語れない。実はそうではなくて、スポーツそのものがあって、後は自分の好みでラグビー、バレーボール、ベースボールなど様々なスポーツをやるというのが、スポーツ本来の姿だろうと思います。

ヒルマン監督が自分の焦点が選手に移ったのを喜ばれたという話は、なかなか面白いですね。前にタイガースが優勝したときには、バース、掛布、

岡田などという選手の名前が強調されましたが、去年のタイガースはどうも星野さんの名前が強くなって、選手はあのと誰だったか、などということになりかねないという感じですね。

監督というのはそのあたりが痛し痒しで、自分のこととすれば、それは自分がやったのだけれども、そこはファンの人たちが選手に強烈な思い出を持ってほしいといつも思われているのでしょう。

杉山 それでは後半は「IT時代における健康とスポーツの役割」をテーマにお話を伺っていきましょう。

アメリカ・ニューヨークでしたか？ デジタルシティという構想がありまして、ネットワーク社会のサンプル的なケースとして紹介されました。日本にもそのようなムードといいますか、波風が起こり始めていると聞きます。その辺りで、成田さんが活動をされているという事例をご紹介いただきながら、話を進めて行きたいと思います。

成田 私がががけているところの一つにその例があります。経済産業省主催で「健康支援システム」というモデルシステム育成の施策があります。これは経済産業省が、高齢者医療費が高まってくるから何とか抑えたらどうか、抑えようというモデルシステムを開発しようということで、地方自治体を対象に公募したら107テーマが集まり、厳選の結果13件をモデル地域に指定して、そこに健康支援システムを定着してもらおうと、それがきっちり実行できたらそれを全国に展開して、やがて全国で高齢者医療を削減していき、元気な日本人を作っていこうというすごい計画があります。

今回の13件の一つに、「仙台の健康自立支援のシステム」があります。私は今、東北福祉大学の教授をやっています、この中心的なメンバーの一人として関わっています。この仙台のシステムはITを使います。そして、新しい健康概念をもとにサービス事業を行なうものです。

仙台市全体にコミュニティーのポータルサイトを持ちまして、そしてデータベースが中心になって、そのデータベースに各端末からアクセスした

データが入ってきます。しかも双方でやりますから、コールセンターというものを設けて、そして遠隔でも相談を受けるというようなシステムなのです。ですからインフラ的には昨日ここで沖縄の説明があったのですけれども、あのシステムが具体的に実現するということです。東北大学、東北福祉大学と、企業が入って、そして行政も入るというコンソーシアムを作っているのです。

今までの医療と違うというのはどのようなことかということで、1、2ご紹介しますが、例えば口の中にある唾液、これは実はものすごい情報を持っているのです。唾液というものを分析していくと、非常に多くのエレメント、健康に対する評価尺度を持っているのです。今は携帯がありますから、それぞれの人からちょっと唾液の一部を取り、それをセンサーで、携帯でデータベースセンターに持って行く、それをお医者さんが評価するという、これは簡単にできるのです。

それからもう一つは皮膚です。皮膚のガサガサ加減とか、これはお化粧という表面もあるけれども、実はこの皮膚という情報、皮膚から出る情報というのは非常に大きいのです。もちろん今、携帯ではカメラがあるでしょう。これで皮膚の状態を撮ります。そうすると、これまた多くの健康状態というのがわかります。それから睡眠、これも大切です。睡眠というものがやはり体、健康にどれだけ影響するかということです。この睡眠情報もいかにしています。それからもう一つ、歯のかみ合わせ、歯がちゃんとかんでいるかどうかです。これはいくら栄養カロリーがある料理を食べても、栄養カロリーそのものは料理の素材を持っているのだけれども、人間の中に入れるということは、1回この関所があるつまり、この歯のかみ合わせ、あごの筋肉から歯のかみ合わせ、これが実は健康の大切な要素なのです。

唾液だとか皮膚だとか歯のかみ合わせだとか、このような従来なかった現象をITを使って健康サポートしていくということです。それらを一つのシステムに置き換えて、データベースを構築しコミュニケーションツールとして活用していく。これは当然ながらポータルサイトを持って、そし

て人によればコールシステム、コールセンターでやり取りもできます。これには会員登録制にし、当然ながら個のデータですから、セキュリティシステムというのがものすごく大事です。

これらができると、簡単、簡便に個人の健康状態がとれ、今度はそのデータを基に専門的な人、例えばお医者さん、栄養士、福祉士、運動の関係の専門家が介在して双方向で問題解決を進めていくことが出来ます。仙台市も光ファイバーが埋設されています。あらゆるインフラもそろっているのです。問題はコンテンツです。何をのせるかがカギでチームはこれに知恵を出している最中です。地域の産業が、システムをきちっと受けていくことが大切です。新しい雇用の創出、新産業の創出です。もちろんIT関連の方々もいます。しかしそのほかにも化粧品会社、下着会社、住宅、それからいろいろなセラピー関連の方々、産業界がそれに全部リンクするのです。

最終的には地元の人が元気になり、地元の産業が繁栄し、外からもそれをうけに交流人口が入ってくる、そして地域が潤う構図にすることです。

杉山 デジタルシティという名前は、そんなに古いものではなかったと思います。日本は長野オリンピックの年に、確か京都がデジタルシティ京都構想のようなものを、京都大学を中心に試みをされたと記憶しています。渡邊さん、デジタルシティ構想といいますが、今、成田さんの実験モデルといいたいまいしょうか、そんな試みはこれからどんどん広がっていくのでしょうか。

渡邊 そうですね、ぜひ広げたいと思っています。その理由は幾つかありますけれども、一番面白いのは、結局デジタルになるといろいろなデータを結びつけて、新しいサービスを作ることができるわけです。例えば、スポーツとか健康をテーマにすると、いろいろな役所が関連しているので、そのようなものをテーマにデジタルシティのようなものを作り上げていくと、いろいろな役所が絡んできて、何かそこに融合のようなものが生まれると思うのです。

良くないのは、中央省庁が縦割りであることです。市町村は一つの市の中ですべての行政をやっているのだから縦割りになってないのかというと、そうでもないのです。市町村も縦割りのような部分があります。これを排除していくきっかけが、このデジタルのデータを扱うというところにあるのではないかと思うのです。そのような意味で、どんどん広げていっていただいたらいいと思っています。

杉山 確かに、各省庁で熱心にスポーツのテーマに取り組んでいらっしゃるのですが、その省庁間の縦割りといいますか、それがなかなか一体になりません。それは省庁間の問題ということよりも、スポーツ界そのものにそのような体質があります。スポーツ界に縄張りという言葉はよくないけれども、日本のスポーツの中でさえも、なかなか統合されなくて、バラバラしているようなところがあります。

スポーツ界にもこのデジタル化・IT化を進め、宝田さんなどが中心になってデジタルスポーツシティのようなものを作られたらいいと思いますね。そこには、あらゆるスポーツ情報が集約され、またゼッターランドさんたちのようなスポーツ界のオピニオンリーダー的な方たちの物の考え方も取り入れる。何か困ったら、すぐにそこにアクセスすると、「そんなの、くよくよしなさんな」というヨーコさんのメッセージが出てきて、「私はこうして問題を乗り越えた」などというQ&Aが出てくるような、そんな素敵なスポーツのデジタルシティができればいいと思うのですが。

だんだんクロージングの時間が迫ってまいりました。ここからは4人の方に、スポーツとITの融合といいますか、コラボレーションによってこのようなことができるのではないかと、このようなことをしてみたいという夢と期待について話していただき終わりにしたいと思います。

ゼッターランド 恐らく私が想像する以上に、ITと関連してスポーツというのは、もしかしたら相当に進んでいるのではないかと、皆さんのお話

を伺いながら思っていました。そこで、夢というよりは、本当にハイテクと人間との関わりあい方というのを、私はいつも考えていかなければいけないのではないかと思います。スポーツをやっていると、夢というものは大変に楽しく大きく、ゴールはどこまでも果てしなく、常にいいサイドを追いかけていくのですが、必ずそれと表裏一体の形で、何事も最悪のケースを想定してやらなくてはいけないという、現実には直面いたします。そうすると、夢を見ることはすごく大事で、でもその夢を達成するためには、その裏にあるものをきっちり押さえていかななくてはいけないという必要性をいつも感じさせられています。

このITもすごく便利だし、そして使いようによっては果てしなくその世界が広がっていくということも、聞いていると実感します。ただ、これがまだまだ活かされるためには、ITシステムの機能そのものが本当に双方向性を持っているにも関わらず、それを使う側の者がどこか一方通行になって使いきれていない、活かしきれていないという感じも受けました。使う方が本当に双方向性を持って、オープンマインドでそれを使っていけば、システムが大きく機能してくるのではないかと思います。

そのテクノロジーによって、人間本来のとても大事な部分、この普遍性を持って、人間がこの世に存在する以上伝えていかなければいけない。伝えていくことが本当に大事な部分というのが忘れ去られてしまわないように、技術が進めば進むほど、原点をしっかり見つめ直さなければいけません。それを常に念頭に置いて、このITに関わっていけたらいいと思います。

杉山 ITの革新が進めば、テレビが表現するスポーツもそのスポーツの楽しみ方も違ってくるかもしれません。現実にはバーチャルな演出というのはたくさん出てきて、アメリカンフットボールのタッチダウンのエンドゾーンのところには、テレビに黄色いラインが入るようになりました。あれはスタジアムでは見えません。あるいはボート競技のフィニッシュのところにはバーチャルなゴール

が引かれています。もっとそれが商業的に活用されたのは、去年のワールドシリーズです。日本での中継ではバーチャル広告というのが出ていました。実際のヤンキースタジアムのフェンスには広告がないけれども、日本でテレビをご覧になっているところに広告が入るといって、バーチャルな演出もありました。

そのようにバーチャルな部分というのがどんどんできて、それがまた、スポーツの楽しみ方にも影響してくるのではないかと思います。

宝田 具体的な話ですが、球技の試合中における選手の運動距離が知りたいです。これは現場サイドから見ると、非常に大事なことなのです。例えばラグビーとかサッカーでは、選手を自動的に追従して運動距離を知りたいわけです。これはカメラ2台ではとても見られませんし、重なったときにどうするのかという問題もあります。動作解析に近いハイスピードのカメラで本格的なやり方をしようとするれば、カメラを何台も使って追従しなければいけません。

例えば、ちょっと視点を変えて、GPSをユニホームの中へ入れ、衛星を使って選手の動きを追従するのが面白いのではないかと思います。ただ、正確さの問題が残ります。それが5メートルのレベルなのか、2メートルのレベルなのかという話ですが、衛星とインターネットを使って、何か選手の距離が分からないかと考えています。そうすれば、その選手の評価が作れます。試合中にサボっているのかサボっていないのかと、そのことが実際の有酸素能力、最大酸素摂取量という指標とどのような関わりがあるのか、いろいろなことが分かってくる可能性があります。そのようなことが知りたいと思っています。

杉山 そういったデータ分析などが進むと、試合をやる前に、その日の天候だとかあらゆるデータが分析され、今日はもう絶対に早稲田は苦しいぞというのが、キックオフの前に出てきてしまったりしませんか。

ピッチャーもブルペンでの酸素の量が増加して

くると「こいつ、先発に決めていたけど、ちょっとおかしいよ」というデータが出てくるとか、何かいろいろ変わってくるかもしれませんね。その辺りが喜怒哀楽を表に出す星野監督のような方だと、その技術を超越して、名監督になってくるかもしれませんし、某々監督のようにベンチの中にコンピューターを入れたいという監督も出てくるかもしれません。

その辺りがまた、スポーツの面白いところかもしれないませんが、ぜひ宝田さん、今日をきっかけにして、デジタルスポーツシティ構想をいろいろなお仲間を誘って、将来実現してください。

成田 私は60歳を越えた時から、何もしないと老化するので、数年前からウォーキング、ジョギングをやっています。去年は2か月に1回マラソンに出たのです。今はやりの地域マラソンです。私が地域おこしをやっているところのマラソンを走るといって、樺マラソン、大根マラソンとかメロンマラソンです。走りながらITを考えています。テレビのマラソンも興味があり見えています。そうすると、ひげの監督が20キロや30キロの地点で、車か自転車で追っかけていって、「Qちゃん、Qちゃん、水、水！」とかやっているでしょう。私はこのようなIT時代に、なぜ監督があのようなところに必死になって行って、水だとかコンディションを自分のメガホンで言っているかということ、これを見てももう本当に何なのかと、これでいいのかなと思うし、もっと何か合理的にできたら、Qちゃんも世界記録がもっと伸びるのではないかと思います。

例えば、ここにオムロン製の万歩計があります。私はこの製品に惚れていて、とても優れたものなのですが、この中に7日間の歩いたデータが蓄積できます。しかもトータル歩数、しっかり歩数、カロリー、支出カロリー、そして距離、これらが出るのです。7日間分です。それでいてこのジャック、ここを開けるとパソコンに接続できるのです。そうするとパソコンには、過去の私の3年間のデータが月別、データ別に全部出ます。それとセンサーとを連携することによって、あなたのレベル

は全国に対してどの順位だとか全部出ます。このIT万歩計にこの携帯電話を加えるといいのではないかと思ったわけです。

そしてこれを薄型にしてランナーの腕に付けます。いまの技術なら簡単に開発できるでしょう。つまり、携帯電話の機能と万歩計の機能を腕に付けるのです。ユビキタスではなくて「ウデキタス」と言います(笑)。そうすると、これはまずデータが全部取れます。データというのは自分が走るデータではなくて、記録データも全部取れるではないですか。そしてデータが取れて、まず通信ができるでしょう。そして通信ができて検査ができるでしょう。さっき私が唾液などと言いましたが、走っている間にちょっとなめれば、唾液情報が入ってくるわけです。要するに血液情報から何から、全部出るのです。

ですからすべてデータという記録データというのと、それからその通信機能、それからそれで検査機能ができます。このような端末がもう現実の今のテクノロジーでできてしまうのです。それでそれを手首などに巻いて走りますと、私もマラソンを走ると結構時間がかかりますから、いろいろなことを考えたりするのだけれども、どこで水を飲もうとか、今日のコンディション、この今の気温と湿気に加減がどうだとかと言ったら、例えばそれがセットされているとすれば、コーチとの連絡ができるわけです。あと5キロで水を飲めとか糖分を摂れとか、事前にデータからの分析と指示が即時にうたれるものです。

田舎のマラソンに親子マラソンがあります。お父さんと子どもが最初是一緒に走るのだけれども、お父さんが「おれも！」と言って、子どもを抜き自分で先を走ってしまうケースがあり、子どもがどこにいるのか心配です。そのようなときに子どもに今ここにいるとか、何でも通信だからできますでしょう。そのような機能が「ウデキタス」にあれば、これは安心、安全もあるし、自分の記録をできるし、監督、コーチとのやり取りもできるし、もうマラソンが面白くなります。これは世界記録のレースに使ってもよし、市民マラソンでもよし、ベストヒットが約束されます。

このように現在の技術と技術をドッキングすれば、できないことはないのです。そうすると恐らく、あのひげの監督があんなに汗かきながら怒鳴らなくてもいいのではないかと思うのです。これが、私の夢です。

渡邊 あの監督がよくテレビに映るのは、テレビに映りたいだけかと思っていましたけれども(笑)、実はITを使えないからですか(笑)。成田先生が非常に商売人なのを見てびっくりしました(笑)。ちょっと大学の先生にしておくのがもったいないです。

今までのITの発展の歴史というのは、スポーツに支えられてきた部分はかなり大きいと思うのです。例えば、力道山が出てきてテレビでしょう。カラーテレビは東京オリンピックでしょう。オリンピックの衛星生中継でマラソンを見たのを覚えていますけれども、あのような技術があったり、最近だと光ファイバーでほとんど画像が乱れることなく送られてきて大リーグの試合も見られます。

そのようなこともあるので、やはり随分ITの発展というのはスポーツに支えられてきたと言えると思うのです。今度は、スポーツの発展にITが恩返しをする番だと思います。

杉山 今日は、改めてIT社会、あるいはネット社会、IT革命といったものを身近に感じられたのか、より専門的な知識を身に付けられたのか、いずれかは分かりませんが、これから皆様方がこの新しい時代、現実に迫っているIT化時代の中でどう過ごされ生きていかれるかがポイントだと思います。

最初に渡邊さんがおっしゃった、幸せな人間生活とは何か、幸せな人生は何か、それは健康であり続けることであり、これからITを活かしてスポーツが健康づくりのために地域とどう結びついていくかを考えることが大切なことではないかと思えます。

あつという間に時間がたったような気がいたします。4人のパネリストの皆さん、大変貴重な、そして興味のあるお話をありがとうございました。

主 催：経済産業省

実行事務局：(社) スポーツ産業団体連合会、日本システムサイエンス(株)

後援：内閣府、文部科学省、沖縄県、名護市、宜野座村、北部広域市町村圏事務組合、(財) 沖縄県観光コンベンションビューロー、沖縄テレビ放送(株)、琉球放送(株)、(株)琉球朝日放送、NHK 沖縄放送局、(株)ラジオ沖縄、エフエム沖縄(株)、(株)沖縄タイムス社、(株)琉球新報社

発行者 社団法人スポーツ産業団体連合会 所在地 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 3-6 能楽書院ビル 6F

不許複製 禁無断転載